



大分県書道

令和7年2月号 No. 416

作品制作の為に

私が所属している「書道研究莞歌社」は、昨年結成六十周年を迎えました。三月に行われた社中展、祝賀会で、高木聖雨先生（日本藝術院会員・日展理事）の講演会が開かれました。偶然にも、第六十回大分県美術展書道展の審査員として来県されたことは、皆さんもご存じのことと思います。今回巻頭言の担当になったので、その講演で高木先生よりお聴きした話を書きます。

まず先生は、「書を学ぶことの基本は古典を学ぶこと、それには臨書と目習いの二つがあり、臨書は手から、目習いは目から（鑑賞）古典を徹底的に学ぶことだ」と言われました。唐以降、明、清、さらに現代に

至るまで「王羲之」「米芾」「顔真卿」の臨書をしていない者は後に名を残していないということ。基本が如何に大切に最も重要であるかということと、過去のプロセスを振り返ること、「伝統を無視して成長した芸術はない」と、青山杉雨先生が言われたそうです。それから作品作りです。表現方法には、潤濁・文字の大小・疎密・黒白のバランス・線の強弱、多少・広い狭いなどがありますが、この内から二〜三個を作品に取り入れるようにする。そして、一作ごとに作品は変わらなければならないこと、作品の構成は常に変えること、つまり試行錯誤しながらより良いものを追究する姿勢が大事なのだろう

「理事」 秋吉 叔子
(栄華)

と私的に解釈しました。私たちは題材を選び、集字し構成を考えたら、そこで満足し、構成を変えることなく何度も同じものを書いて一番を選んで作品作りをしませんか？先生のお話は目から鱗が落ちる思いがしました。さらにこうも話されました。「書き上げた作品を360度違う方向から眺め考察することが大事なのです。」と。そして「古典の趣きが作品に出ていなくてはいけない。」とも言われました。

私はこれらのことを参考にして位置の均等を戒め、見せ場を意識して作品制作に励みたいと思います。基本は忘れずに！